

1 派遣期日 平成28年11月12日（土）～11月13日（日）

2 研修先 学校名（会場名） 桐蔭学園
所在地 横浜市青葉区鉄町1614番地
<http://toin.ac.jp/al/>

3 研修内容

（1）「アクティブ・ラーニング公開研究会2016」について

今回参加させていただいた研究会発表会は、桐蔭学園において公開された「アクティブ・ラーニング公開研究会2016」である。当校はアクティブ・ラーニングの授業について研究を推進し、公開研究会を2年連続で開催した。

（2）公開授業参観 中学1年 理科 「呼吸のはたらき」（肺の仕組み）

① 授業方法

毎回の授業は、家庭での自習（宿題）を含めて「自学自習」や「ペアワーク」を取り入れたスタイルで行われている。

・教師が教科書の内容を説明する前に、生徒自身が行う。

1 教科書を読み太字の語句を**覚える**（個人）

2 太字の語句を教科書にあるような表現を用いて**説明**する。（ペアワーク）

3 見出しの内容を、太字の語句を用いて**説明**する。（ペアワーク）

・教師が説明したり質問を受けてから、生徒が行う。

4 指名された生徒が教壇に立ち、見出しの内容をクラス全体に**説明**する。（クラス全体としてのワーク）

5 別の生徒が、4の生徒の説明について**評価**し、それを口頭で伝える。（クラス全体としてのワーク）

6 **振り返り**シートを記入する。（個人のワーク）

② 授業の実際

・授業の冒頭で、教師から前時の振り返りについての評価があり、その後に生徒は自分の振り返りを見直す。

・上記1の個人の理解は、続く2と3「ペアでの説明」の前段階であり、生徒は他の生徒に説明することによって、自身の理解を深めることができる。

・ペアワークは、説明をする生徒と聞く生徒を交代して行われる。説明をするには、教科書の言葉ではなく、自分の言葉を使った方がよい。また、説明をする生徒のルールは、「教科書やプリントを見やすいように示す。笑顔で、人の目を見る。身振り手振りをして、はっきりゆっくり話す。気持ちを伝える。」聞く生徒には、「うなずきあいづち、笑顔」などのルールがある。授業の中でそれらを確認しながら進めている。

・評価は、発表の仕方と、内容について行われる。

・今回の授業では、教科書の知識を確認した後に、ゴム風船と底を切り取ったペットボトルを用いて肺の模型をどのように作るのかを考える活動を設定した。作った後に、生徒が説明を全体の前で行い、クラス全体で学ぶ機会になった

・「振り返り」は、8分ほどで行っている。内容は、「学んだ事柄」「感想」「授業態度」「教員による授業態度評価」がある。振り返りが終わった生徒は、すぐに予習を始めた。

（3）基調講演「アクティブ・ラーニング型の授業としての反転授業」 関西大学教授 森 朋子

森教授は、これまでの習得型の学習とアクティブ・ラーニングの授業の問題点を捉え、「アクティブ・ラーニング型の反転授業」を提唱している。「アクティブ・ラーニング型の

反転授業」(以下「反転授業」)では、授業前に予習を行う。

- 1 《内科1》予習によって個人の「わかったつもり」を作る。
- 2 《外化》授業で、グループでの話し合い(アクティブ・ラーニング)を通して「葛藤・躊躇」のゆらぎを経験する。
- 3 《内科2》最後に、個人にもどり、本当の「わかった」を作る。振り返りやまとめを行う。

このように、「個人」→「グループ」→「個人」の活動であり、《内化1》→《外化》→《内化》のように、《内化》《外化》の往復によって、内化の質的向上を目指す。《外化》では、葛藤や躊躇などの「ゆらぎ」を通して、「わかったつもり」から「わかった」を、主体的に自分で作る。

予習をすることは、グループワークのアクティブ・ラーニングにおいて、学習内容の何を扱うかすぐ分かり、すぐに深い議論に入ることができるようになる。何より個人の理解が作ったグループワークになる。

前述の(2)公開授業で、ペアワークとして教科書の太文字をお互い説明する(教え合った)ことも、反転型の学習法である。人はアウトプットするときなど知識を使うときに、自分のものとして知識を内化することができるという、学習の理論に基づいている。

(4) 総括講演 京都大学教授 溝上 慎一

〈活用問題の作成〉 「活用Ⅰ」は習得された知識・技能を活用した、習得を助ける、あるいはより確かなものにするための学習。「活用Ⅱ」は習得された知識・技能を新しい文脈に活用した発展的な学習。実生活・実社会につなげた、複数解が得られような問題。アクティブ・ラーニングの視点の1つ、深い学びを促す各教科の見方・考え方を採った学習でもある。

〈深い学びとは〉 「活用Ⅱ」のような「各教科で習得した知識や考え方を活用した『見方・考え方』を働かせて学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考え方を形成したり、思いを基に構想・創造したりすること」

(5) その他の研究について

桐蔭学園では、組織を作り、研究計画の見直しを図りながら研究を進めてきた。生徒向けにアクティブ・ラーニングについての通信を出すなど、教科ごとに目指す力を設定しシラバスでも公表している。また、活用問題を作成して、それを保存して活用できるようにしたり、話し合いやペアワークの仕方の指導を続け、「まなボード」と呼ばれる小ホワイトボードに書き込み黒板に貼り付ける方法や、「ペアワーク・グループワークの原則」を掲示したりしている。

4 感想

授業参観を実際に行うことにより、アクティブ・ラーニングの実際を知ることができたと同時に、授業改善のポイントが分かり、大変参考になった。発表の仕方やペアワークの仕方などを掲示をしていることが、アクティブ・ラーニングを礎になっており、本校でもすぐに実行したいと感じた。

授業方法が「反転学習」の理論に支えられたものなので、実践と理論が合致していて、大変分かりやすく納得できるものであった。今まで学校課題研究でアクティブ・ラーニングの追究をしてきて、「個人」→「グループ」の過程を経ても、真のアクティブ・ラーニングにならなかった原因が何となくつかめた。「グループ」のあとに「個人」に戻すことも重要であり、これらから授業の作りに生かしていきたい。

授業や評価で扱う「活用問題」は、アクティブ・ラーニングの深い学びを実現させるためには、必要なものである。本校でも、活用問題の活用を通じたアクティブ・ラーニングの仕掛けを検討していく必要がある。

研究を始めて2年目の桐蔭学園において、生徒の学習態度や発表の仕方の定着が見られた。本校でも生徒の学ぶ意欲や態度の形成大事にしながら、生徒主体の授業作りについて、これからも研究を進めていきたい。